

トゥラハーンの詩

船木満洲夫

序

トマス・トゥラハーン(Thomas Traherne, 1637?—74)の前世紀末に原稿の発見された詩集と散文集『黙想録百題集』が、Bertram Dobellの手によって今世紀の初めに出版された(*Poems of Thomas Traherne*, 1903; *The Centuries of Meditations*, 1908)。その後 J. B. Leishman によって、¹⁾ 彼が17世紀形而上詩人の一人に数えられてからまだ半世紀しか経っていない。評価の定まった詩人とは言い難い。全体的な紹介や論述が多くはなされてはいない。惹きつけるよりも反発を与えるのかも知れない。自分の恍惚境にいい気に浸っている詩人、あるいは詩の未熟な神秘主義者ぐらいに片づけられるのかも知れない。

トゥラハーンには原罪と恩寵の観念が乏しい。キリスト教神秘家に著しい禁欲や浄化、自己放棄のことも説かない。あるいはダンのような内面の葛藤からもほど遠いと論じられたりする。²⁾ これだけで魅力に欠ける詩人と受けとられてもやむを得ないかも知れない。

彼の書くことが自らの体験に基づいているということ、この点を読者はまず念頭におく必要がある。「第三の百題集」1節に述べているように、純潔な認識と神聖な光はもって生まれたものと考え、この神の最大の贈りものは「書物によっては得られないので、私は体験によって教示しよう」³⁾ というのが彼の基本的な態度である。ただ彼の詩にそうよう体験がそのまま提示されているかどうかは別問題で、むしろその再現であるよりは回想的解説であることがふつうである。トゥラハーンの顕著な特徴は、無垢の至福の世界を歌い、至福を享受する手段として純粋な感覚を、そして賛美と愛を重んじ、愛こそ神との一体の交わりを実現する真の道と考えたことである。時間と永遠の両面に同時に生きようとしたと言うか、時間の中で永遠に生きようとした詩人の一つのタイプを彼に見ることができよう。本稿はトゥラハーンの主要な詩をとり上げて、神との関係を中心にその宗教性を吟味しようとするものである。

(1)

トゥラハーン詩集の冒頭に「評家への著者の言葉」(*The Author to the Critical Peruser*)が載っている。自らの詩論を述べた詩である。要点をかいつまんでおこう。「本然の姿の真理」

(The naked Truth)あるいは「単純な光」(A Simple Light)に対するヴィジョンをもって、最高の神秘をも感覚に明瞭なものとし、魂の開いた眼に「至福」(*Felicity*)が見えるようにする——これが詩人のねらいである。その妨げとなる比喩は排して簡明なスタイルを重んじ、そして神のわざを見ること賛美することをせぬ詩人たちに反対の立場をとる。ここからヴィジョンが第一で、そのヴィジョンの透明な反映である詩の言葉は二の次ということになり、事物を事物としてではなく神の作品として見るトゥラハーンの様子が帰結できるであろう。

さて「挨拶」(*The Salutation*)は彼のヴィジョンの純粋な結晶のような詩である。生まれたばかりの「私」は、驚異の念で身体各部分にこれまでの所在を問う。長い間「ちり」(*Dust*)の下「無」(*Nothing*)であった「私」は、今や身体部分を宝ものとして喜びとして受けとる。「ここに」(*here*)、「今」(*now*)という新生の時点にしほることにより、以前と以後の隔絶がきわ立つ一方、非時間と時間の区別が解消されると言うか、生の時間の中へ永遠が流れこんだかのような感覚の目覚めである。

New Burnisht Joys!

Which yellow Gold and Pearl excell!

Such Sacred Treasures are the Lims in Boys,

In which a Soul doth Dwell;

Their Organized Joynts, and Azure Veins

More Wealth include, then all the World contains.

(新しく光り輝く喜びよ／黄金にも真珠にもまさるものよ／魂が宿る少年の肢体は／実に聖なる宝だ。／その関節の組織とるり色の血管には／全世界が保有するより以上の富がある)

1音など韻律に独得の輝きを感じられる。⁴⁾ ‘Organized Joynts’ ‘Azure Veins’ などトゥラハーンの詩には珍しい語句が目につく。詩人は感覚と魂の結合に永遠の価値を見出す。「ちりから私は起き上がり／今や無から目覚めて／私の眼に映る(挨拶する)この輝かしい領域を／神からの贈りものとして受けとる」(From Dust I rise, / And out of Nothing now awake, / These Brighter Regions which salute mine Eys, / A Gift from GOD I take)と歌ったあと、神の贈りものである「私のもの」(*mine*)が自然の被造物全体に拡大される。すでに読みとれるように「私」は「創世記」のアダムと同じ位置に立つ。⁵⁾ こうしてエデンの園に「神の子、神のあと継ぎ」(*his Son and Heir*)として入る。背後には幼いころの詩人の体験のみではなく、⁶⁾ 「マタイ伝」18章3節が関係していることは、⁷⁾ あとの「無垢」という作品でいっそう明らかになるだろう。幼な子のようにならなければ天国に入ることはできぬのであり、この教えへの信仰が働いて、人類の原初と個人の誕生という極点での融合が現出したにちがいない。

生き生きとした身体感覚の目覚めの描写は、詩人トゥラハーンの到達点を示すように思われる。

「驚異」(Wonder)は「挨拶」と同様の主題で、ここにも彼の詩の特性がよく出ている。「第三の百題集」2節、3節と関連をもつことも前詩と同じである。

How like an Angel came I down !
 How Bright are all Things here !
 When first among his Works I did appear
 O how their GLORY me did Crown ?
 The World resembled his *Eternitie*,
 In which my Soul did Walk ;
 And evry Thing that I did see,
 Did with me talk.

(いかに天使のように私は降りてきたことか／／ここでは万物がいかに輝いていることか／／神の作品の中に私が初めて現われたとき／おお、その栄光が私をいかに飾ったことか？／世界は神の永遠に似ていて／私の魂はその中を歩いたのだ。／そして私の見るものすべてが／私と語り合ったのだ)

天使のように現われ、天使のように見た世界は神聖な「無垢」(Innocence)の状態で、「私」は「感覚」(Sence)に「霊」(SPIRIT)の力を感じたと言う。「私の内部には／生命の海がワインのように流れた」(I within did flow / With Seas of Life, like Wine)という詩行は、「第一の百題集」29節の「海そのものがあなたの血管に流れるまでは……そしてあなた自身が全世界の唯一のあと継ぎだと感じるまでは、あなたは这个世界を正しく享受することはない」⁸⁾を想起させる。内部の生命感も「あと継ぎ」の所有者意識も「挨拶」と共通している。問題は悪い面がまだ隠れていて見えなかったと述べている点だ(4, 7連)⁹⁾。上の引用のように至福は「私が初めて現われたとき」のことであり、これはこの詩が「私が生まれたとき」(When I was born)で結ばれるのと照応する。出生時というわく内に限られているのである。永遠に似た世界は詩的ヴィジョンのそれであり、「驚き」(Amazement)が至福であることは題名と合う。時は墮落以前のことであり、以後のこの世の汚れを知る詩人が、幼児にもどって出生時に照明をあて、感覚と霊の結合したヴィジョンの世界を描き出したと見ることができよう。天使は天国の存在以外のものでない。このようなヴィジョンが、人間の神聖な可能性を信じる表われであることも否定できまい。¹⁰⁾

「エデン」(Eden)も同類の詩。「無知」(Ignorance)のため、人間の狂気と不幸をつのらせるすべてから隔離され、「罪」(Sin)というようなものも思いもよらず、人々みんなが純粋で「不滅性」(Immortalitie)に満ち、見るすべてが自分を喜ばせたと歌う('all'の頻出が先の「驚

意」の‘all’‘evry’同様目につく)。そしてアダムの場合と同じ原初性、「本源の単純さ」(Original Simplicitie)を強調する(‘first’の連発に注意)。

Those Things which first his Eden did adorn,

My Infancy

Did crown. Simplicitie

Was my Protection when I first was born.

(初めてアダムのエデンの飾りとなったものが／私の幼児期を／飾った。単純さが
／生まれたばかりの私の防護となった)

詩人は「愛」(Lov)の最初の働きの証をここに認める。人間のわざから遠ざけられたのは、「神の栄光の驚異」(The Glorious Wonders of the DEITIE)を見る、アダムのように単純さで見ためただったのである(‘see’と‘Simplicitie’, ‘see’と‘DEITIE’の押韻)。このように人間の墮罪前に帰って神のわざを見ることが、神と最も近づく道だとトゥラハーンは考える。不滅への道すなわち原初への道という思想である。

「無垢」(Innocence)も同類の作品である。最も不思議に思うのは、内部に一点の罪の汚れも感じなかったことだと言って、魂の純粋な輝きを強調する。「魂は一日中／ひざまずいて賛美した」(My Soul did kneel / In Admiration all the Day)の詩行に、その様相が端的に表現されている。「私」は真の悦びの世界を、そのとき見ただけでなく今日に至るまで見る。ここにヴィジョンの性格がのぞく。むかしの清純無垢を詩人は失っていると自覚するので、幼時の回想のヴィジョンに熱がこもる。

I was an Adam there,

A little Adam in a Sphere

Of Joys!

(私はそこで一人のアダム／喜びの／境域の小さなアダムであった!)

ここで彼個人に限られたことを語っているのではない。「第二の百題集」12節に、「あなたはそれら(貴重な被造物)を享受するアダムまたはエバである」¹¹⁾とあり、アダムは人類と同時に各個人の原型であると考えられる。¹²⁾それらが自分のものになるかどうかは享受するか否かによる。¹³⁾そのためにはどうすべきか。無垢の光景を見るためには、無垢にならねばならぬとの運びであり、過去のことを歌いながらこの詩は最後に、「私は再び子供にならねばならない」(I must become a Child again)で終わる。「第三の百題集」5節が「マタイ伝」18章3節の意味を説明するが、心の思いが「幼児のように澄んで」(Infant-like and Clear),そしてこの世の装いや

慣習から解放される必要が説かれている点を指摘すれば今は足りるであろう。

さて「準備」(*The Preparative*)になると、これまでの詩と比べて悲哀の調子が気になる。「挨拶」が生発の喜びを賛美するのに、それ以前の無と鮮烈に対比したのに対して、つづく3編の詩は以後の現実的要素を否定的に組みこんで、記述的な色合いが目だったが、これが「準備」に重くもちこまれたかのようである。「挨拶」の場合が全身全感覚の生の目覚めであるのに、「準備」は「私の身体がまだ活動しないで」(*My Body being Dead*)と始めて、身体の各部分を自分のものと感知する以前、「私は新しい皮膚に包まれて／自分の知らない家の中にいた」(*I was within / A House I knew not, newly clothd with Skin*)と時の状態を歌う。冒頭から肉体が主題外にのけられる。

Then was my Soul my only All to me,

A Living Endless Ey,

Far wider then the Skie

Whose Power, whose Act, whose Essence was to see.

(そのとき私には魂だけがすべてであり／それは空よりはるかに広大な／生きた無限の眼／その力、その行為、その本質は見ることであった)

身体に対する魂、部分に対する全一、外部の客体に対する内部の主体が前面に押し出される。

「私」が光の天体として内面的に美化され、視覚そのものに単純化されるとともに、生命も感覚も本然の知恵に純化・同一化される(このあたりの‘I’と‘Ey’, ‘Light’と‘Sight’, ‘Sence’と‘*Intelligence*’の押韻が目目される)。「黙想する内部の眼」(*A Meditating Inward Ey*)と言い、視覚そのもの、眼そのものを強調する詩人の主張は、「単純な感覚こそ／万物の美点の第一である」(*Simple Sence / Is Lord of all Created Excellence*)に要約される。純粹な感覚の重視が異様にきわ立つが、これは肉体のない抽象化された感覚以上のものであろうか。こうして「私」は現世の困窮も心労もなく、罪も不幸も無縁のように自由だったと明言する。

Tis not the Object, but the Light

That maketh Heaven; Tis a Purer Sight.

Felicitie

Appears to none but them that purely see.

(天国を形成するのはものではなくて／光であり、純化された視覚である。／至福は／純粹に見る者にのみ現われる)

つまり外部のものは問題ではなく、至福の光を見る眼、すなわち本然の感覚と無垢な知恵が肝

要なのだ。詩人は最後に、引退して自由になるよう自分の魂に呼びかける。これは現世の反対の至福の道へ帰ることを意味するが、決意の表明としては弱く感じられるのは、原点があまりにも純粹で内実に欠けるせいであろう。心境の分裂があとに残り、神への距離の遠さを思わせるのである（この詩にはたまたま‘God’の語がない）。末尾の「賛美する」(Admire)の語が暗示の光をとどめることになろうか。

「ヴィジョン」(*The Vision*)は「準備」の結論を引きついで、「逃走は準備に過ぎない。見ることは／深くて無限だ」(*Flight is but the Preparative: The Sight / Is Deep and Infinit*)という出だしである(‘Flight’は引退を意味し、‘Sight’と韻が合う)。どのように見るかが主題であり、いっそう哲学的な思考が加わる。ポイントは世俗のことも「天上の光」(*Celestial Light*)で見ること、それからこの世を自分のものとして見ることにある。この世の苦難は自分を高めるためのものであり、見ることは生き方の問題に直結する。「万物がお前の進歩に力をつくし／お前の安らぎに／やさしく寄り合うのを見ること」(*To see all Creatures tend / To thy Advancement, and so sweetly close / In thy Repose*)、そうしてすべてが自分に合一するのを見るのが、至福を見ることだと詩人は考える(原因と結果の論議も含まれるが、これは後の「予見」のテーマ)。最後の連¹⁴⁾は全一的に見ることを高唱して、次のように結ばれる。

Who all things finds conjoynd in Him alone,
Sees and Enjoys the Holy one.

(万物が自分にのみ連結しているのを知る者は／聖なる者を見て享受する)

源泉の神の位置にまで高められた境地を意味するようにとれる。万物と自分と神の連結の均衡が整っているのがトゥラハーン的であり、彼の高揚した深入りようはこの連全体の調子からも疑い得ない。

「法悦」(*The Rapture*)は幼時の至福の再現の詩。賛嘆に始まって賛嘆に終わる。神秘的な歓喜の実現を歌うが、その叙述的描写は見られない。

Sweet Infancy!
O fire of Heaven! O Sacred Light!
How Fair and Bright!
How Great am I,
Whom all the World doth magnifie!

(すばらしき幼年よ／／おお天国の火／おお聖なる光／／何と美しい輝きか／／何と偉大であることかこの私は／世界全体が崇めるとは／)

幼年賛美は自己賛美である。「私」に宿る天上の喜びは神からの愛の贈りものであり、この内部の神性を賛美するのである。この詩には疑問符も使用されるが、疑問というよりは感嘆の表われに過ぎない。自己の神性の賛美とその恍惚境において、この詩人は神と最も接近するように思われる。

「接近」(*The Approach*)で彼の立場がさらに明確になろう(この作品は「第三の百題集」4節を占める)。幼時の思念の喜びは「私の驚嘆と神の栄光」(*my Wonder and his Glory*)を高め、神の完全性を証すると詩人は考える。神は私たちの心をよく訪れるのに私たちは神を追い払う。彼自身神を追いやったと告白する。

But now with New and Open Eys,
I see beneath as if above the Skies ;
And as I Backward look again,
See all his Thoughts and mine most Clear and Plain.
He did Approach, he me did Woo
I wonder that my God this thing would doe.

(しかし今や新たな開いた眼で／私はまるで空の上のように下を見る。／そして再び過去をふり返ると／神の思いと私の思いのすべてが明瞭に見える。／神は接近した、私に言い寄ったのだ——／神がこんなにしたもうとは驚きだ)

見ることによって、思念の域での神の接近の事実を認識するのである(‘his’と‘mine’の並置が冒頭連の場合と同じく注目される)。神との交わりは全くこちらの態度いかんによる。神は「悦びの深淵に」(*In deep Abysses of Delights*)包み隠されているのであり、回想が不可欠であるとともに、純潔な幼時が導きの教師の役を担うのである。ただ注意したいのは、詩人は神の接近以上のことは言っていないということである。

次は「おしの時期」(*Dumnesse*)¹⁵⁾という作品である。人が生まれたとき口がきけず耳が聞こえないのは、ものを内面的に観想して神の永遠の生命と愛を貯え、また罪と言葉の害悪から魂を守るためだと詩人は主張する。彼の経験ではその幸せは言葉を知るまでの間つづき、光の世界の内部に自分ひとりだけで住んで、神の創造したすべてを享受しながら、「罪に対して難攻不落の要塞」(*A Fort, Impregnable to any Sin*)に閉じこもっていたという。

The Heavens were an Orakle, and spake
Divinity : The Earth did undertake
The office of a Priest.

(神託の天が神意を／伝え、大地が僧侶の役を／引き受けた)

この殿堂が言葉の習得とともに、騒々しい敵軍のために破壊されたという。純粋な感覚の世界が神を啓示するとトゥラハーンは信じているのだが、ここの要塞に関する表現の強烈さはどうだろう。光の世界の要塞の堅固さとその倒壊は、世俗の力の前には防護が不可能であることをほのめかすものではないか。にもかかわらず、ものが言えぬ幼いときに聞いた最初の言葉ならぬ言葉は、心の内部にしかと根づいていて、聞こうとしさえすればそのささやきが心の耳に聞こえるのであり、詩人は「最初の印象こそすべて不滅である」(*The first Impressions are Immortal all*)と高唱して、幼時の純粋な直観の永遠性を疑わない。これに拠るしかないのであろう。世俗の敵の叫び声とちがってささやくその声は、聞く意志があるかどうかは鍵であり、この詩からしてもトゥラハーンは単なる楽観論者ではなさそうだ。

「沈黙」(*Silence*)も内部の神的世界について説く。内部のわがが最高で、外部のわがは墮罪後に生じたもの。教会建設とか貧者への施し等々も低次元の領域のことと詩人は考える。アダムの最初の唯一のわがは、自分の内部に至福を享受することであり、彼の場合も同じだったという。「無垢の世界」(*A World of Innocence*)が自分の所有だったのである。

No other Customs, New-found Wants, or Dreams

Invented here polluted my pure Streams.

No Aloes or Dregs, no Wormwood Star

Was seen to fall into the Sea from far.

No rotten Soul, did like an Apple, near

My Soul approach.

(世俗の慣習も新発見の欲求も新案出の夢も／私の純粋な流れを汚すことはなかった。／沈香もありも、また苦よもぎの星も／遠くから海に流れこむことはなかった。／腐った魂がりんごのように／私の魂に近づくことはなかった)

「第三の百題集」10節に記すように、魂はりんごのように腐ると次々に腐らせる。トゥラハーンは魂の汚染の現実の恐ろしさを知るが故に、幼時の世界を飽くことなく美化するのであろう。自分の胸は悦びの海である神から流れこむ海、つまり「広大無限の受容力」(*A vast and Infinit Capacitie*)で神のようになったと歌い、そして「私が世界の中にあるよりは、むしろ世界が私の中にあった」(*The World was more in me, then I in it*)と語る。このようにアダムの無垢と重ね、また海のイメージを用いながら神と親近な状態を表現するとき、回想よりも思考が機能していることが否めない。

「私の精神」(*My Spirit*)はトゥラハーンの最も総括的な詩と見なされる。¹⁶⁾

My Naked Simple Life was I.

That Act so Strongly Shind

Upon the Earth, the Sea, the Skie,

That was the Substance of My Mind.

The Sence it self was I.

I felt no Dross nor Matter in my Soul,

No Brims nor Borders, such as in a Bowl

We see, My Essence was Capacitie.

(すはだの単純な生命の私であった。／その行為は強烈に／大地に海に空に輝き／それは私の心の実体であった。／感覚そのものの私であった。／私は私の魂にかすも膿も感じず／容器に見るようなふちもへりも感じず／私の本質は受容力であった)

「第二の百題集」には、天国においては魂は行為そのもので(73節)、魂のすべての能力が行為に変わり(75節)、また霊の世界は神聖な生きた存在、従順な魂の自発的行為である(90節)と書かれている。この詩の述べるところも魂は生きた行為である。「感覚」「受容力」は理解の行為の意味を含むであろう。前の「準備」という詩では魂の本質が見ることと言われ、後の「予見」では神の本質が行為そのものと述べられるが、この詩が扱うのも神のように単純な、しかも無限の遍在する生命の領域である。「その本質は真実の完全な／行為に変容する」(Its Essence is Transformd in a true / And perfect Act), 「その行為は内在的で、しかもそこにあった」(The Act was Immanent, yet there)と述べ、さらに魂の内面の様相を次のように説明する。

A Strange Extended Orb of Joy,

Proceeding from within,

Which did on evry side convey

It self, and being nigh of Kin

To God did evry Way

Dilate it self even in an Instant, and

Like an Indivisible Centre Stand

At once Surrounding all Eternitie.

(不思議な拡張した喜びの球体／内部から発して／四方に伝播し／神の近親として／至るところに／即座に膨張するが／不可分の中心のようにとどまり／同時に永遠をとり巻いていた)

魂または自我の球体が、すべてを包括する永遠の中心をなしているというのがトゥラハーンの考えである（「第二の百題集」80節参照）。客体と主体の区別がなくなり、見ること行なうことによって万物あるいは感覚的対象が内面の存在となる。そういう単純かつ無限の自我の神との親近性を詩人は強調する。「第一の百題集」100節に記すようにその無限は神の無限であり、また「第二の百題集」84節では「神は眼そのもの、耳そのもの」¹⁷⁾と書いているが、この詩では魂について同様の表現がなされる。散文の方では魂における神の内在を強調するまでに至っている点も念頭においてよからう。¹⁸⁾ このようにトゥラハーンは神との親近性を追究した。

「人体」(*The Person*)は人体賛美の詩で「挨拶」と関連する。ただあの四肢の目覚めの歌とちがって説明的である。飾りのないありのままの姿を詩人は称揚する。

The Naked Things
Are most Sublime, and Brightest shew,
When they alone are seen:
Mens Hands then Angels Wings
Are truer Wealth even here below :
For those but seem.
Their Worth they then do best reveal,
When we all Metaphores remove,
For Metaphores conceal,
And only Vapours prove.

(すはだのものは／それだけで見るとき／最も崇高で光輝に映える。／人の手は天使の翼よりも／この地上では真実の富である。／天使の翼は実体がないのだから。／それらの価値が最もよく現われるのは／すべての比喩をとり去るときである。／というのは比喩は隠蔽し／空虚なもやの証となるだけだから)

冒頭の「評家への著者の言葉」と符合する比喩の排除の主張は、当時の傾向の反映のようだ。¹⁹⁾ トゥラハーンの場合、比喩は神の創造の享受を妨げるのである。身体各部分、それらの調和と美が真実の喜びであり、これがじかに神の賛美につながる。人間が神の「形」(*Image*)²⁰⁾に造られたとの「創世記」の教えが、感覚的に息づいていると言ってよからうか。

(2)

さてこれから『至福詩集』(*Poems of Felicity*)には載っているが、ドウベルの稿本にはない作品群に入る。そのめばしい詩の一つに「便り」(*News*)を数えることができよう。これは

「第三の百題集」26節を占めているが（多少ちがいあり）、その直前の25節から知れるように、この詩は子供のころ便りをどんなに渴望したかを回顧したものである。

News from a forein Country came,
As if my Treasures and my Joys lay there.

（よその国から便りが来た／私の宝と私の喜びがそこにあるかのように）

強い期待と願望をもって幸せの接近を求めたことが、‘As if’の反復と、便りを迎える魂の姿の具体的な描写で表現される。魂が自分の耳の中に呼びこまれて、そこにいたたまれない様子が鮮やかである。詩人はここに「聖なる本能」(Sacred Instinct)の働きを認める。「自然の本能の真実のささやき声」(a real Whispering Instinct of Nature)と「第三の百題集」16節で言う本能である。これによって未知の至福を求めるべく促されたのだが、しかし至福は見えないのであり、海のかなたに期待したものは「不在の幸せ」(absent Bliss)だったのである。この世の宝は遠くにあるものではなく、自らが中心をなす花であり冠であるとは、夢にも思わなかったと詩人は反省する。大事なものは見る感覚である。

The hev'nly Ey,
Much wider than the Sky,
Wherin they All included were.
（空よりずっと広大な／聖なる眼／そこにすべてが包含されていたのだ）

前の「準備」で、見ることに専一の幼時の魂について言われていたことだが、これは重要な照応であり、この「便り」で便りを聞く耳ではなくて、万物の至福を見る眼が魂の本質をなすとの考えがきわ立つ。観念よりも感覚重視の姿勢である。

「変節」(*The Apostacy*)では鋭い対比が読まれる。幼いころは純粹で、エデンの園のアダムのように幸せを享受していたのに、やがて自然の富が人間の新発明の富に負かされてしまう（「第三の百題集」9, 10節参照）。「愚かな人たちが／欲求をつのらせる／慣習の愚行に血迷って…」(only foolish Men, / Grown mad with customary Folly / Which doth increase their Wants ...)と詩人は歌う。不幸は内部の本性の墮落よりも、外部の慣習にとらわれることから生じるという主張である（同、8節参照）。こうして汚れた眼で安びかものを眺め始める。

Drown'd in their Customs, I became
A Stranger to the Shining Skies,

Lost as a dying Flame.²¹⁾

(慣習におぼれてしまうと、私は／輝く空のよそ者となり／消えかかった炎のように道を失った)

このように慣習のために神から離反し、神や天が存在しないかのようにその方に無感覚になったとは痛切だ。新案・新種の富が神の生活から遠ざけて神なしの生活をもたらし(同、13節参照)、こうして神を失って全世界を失ったのである。この詩は神の創造したままの純粋な生活を回顧するとともに、世間の慣習と創案のまやかしを手きびしく批判する。人間のすべての墮落はアダムの罪に由来するとトゥラハーンは認識するのだが(同、8節参照)、他人に教えこまれて悪に染まる以前の幼児の状態を、アダムの墮罪前と重ねてそこに至福を見出そうとするのは、個人的体験とキリスト教の教義の融合であることが明らかであろう。善なるものへの性向にもかかわらず悪に染まったことに対する彼の痛切な反省には、個人を人類の一人と見なす立場がありありと読みとれる。

「孤独」(*Solitude*)²²⁾は、「第三の百題集」23節と同様の恐怖の体験を歌ったものと考えられる。「暗く曇った気の滅入るような夕方、万物は死んだように静まり返っていたが、野原に私がひとりでいると、ある欠乏感と恐怖感が想像も絶するほど私を襲った」²³⁾と散文は記す。しかしそこでは大地全体との関り、神の摂理の神秘との交わりについて、慰めとなる教えを得たことが書かれているのに対して、詩の方は絶望的な挫折感が支配しているのはどうしたことだろう。

Ye sullen Things!

Ye dumb, ye silent Creatures, and unkind!

How can I call you Pleasant Springs

Unless ye eas my Mind!

Will ye not speak

What 'tis I want, nor Silence break?

O pity me, at least point out my Joy:

Som Kindness shew to me, altho a Boy.

(お前たち、愛想のないものたちよ／／おし黙ってもの言わぬ薄情なものたちよ／／私の心を楽にしてくれないのに／／どうしてお前たちを楽しい泉と呼べよう／／私が欲しているのは何なのか、お前たちは／／話してはくれないのか、沈黙を破ってはくれないのか？／／ああ私を哀れんでくれ、せめて私の喜びを指示してくれ。／／まだ子供だが、少しは私に親切を示してくれ)

自分の欲求さえわからないのに大地の万物は教えてくれず、答えようとはしないと嘆く詩人の姿である(冒頭の‘desolate’ ‘forlorn’なども珍しいが、ここの‘sullen’ ‘unkind’は彼のほかの詩には見当たらない)。天に近く立つ教会の鐘の音も儀式も同様に慰めにはならない。至福とは何か、どこにあるのかと詩人は問う。そしてこの作品は‘O where!’で終わるのだが、その絶望の調子にもかかわらず解答は含まれている。欲求の対象が外部には見つからないのに、その対象が存在することは疑っていないだけではなく、²⁴⁾最終連で‘O Eden fair!’ ‘Felicity!’と呼びかけるとき、心の内面のエデンの園に至福を求めるべきことが、おのずからほめかされているではないか。しかしまた、散文の回想とはちがって詩でこそ表現し得たわびしい喪失感が、真実の心情であったことも事実であろう。

「貧乏」(Poverty)が「孤独」とつながりのあることは、両詩にのみ見られる‘desolate’ ‘forlorn’の語からも知れる。ところが「貧乏」は屋内の体験であり、この点で前の詩の体験と異なることは明らかで、こちらは「第三の百題集」16節と関連をもつ。それは4歳のころの回想である。神が存在するのならばその慈愛は無限であるはずだし、慈愛が無限であるのならば神は無限の富を与えるはずなのに、どうして自分がこんなに貧しいということがあり得るのか——この疑問はしかし、自分が自分の魂も肉体も知らず、また自然の万物のことも考えずに、それらとの関係が欠如していたためであり、それらが自分のために造られていることを知るとともに、神を得たという回想である。これはそのまま「貧乏」の解説になる。自分の貧しさを嘆き、自分を造った神の愛が無限でないはずはないという方向に詩は運ぶ。「神の作品が私の富となるまで／愛も平安も私を燃え立たせなかった。／しかし今は私に神がある」(till His Works my Wealth became, / No Lov, or Peace did me enflame: / But now I have a DEITY.)という結びは、神の作品がすべて自分のものになったことを意味し、全世界を得れば神を得るとの思想が背後に働いているであろう。最終行の急転はとってつけの唐突さを感じさせないでもないが、物質的な貧しさから精神的な富への転換が、すでに詩に暗示されていると解してよいかも知れない。

「不満」(Dissatisfaction)で詩人はどんなに至福を求め、どんなに拒まれたかを歌う。「聖なる喜びの場所」(the place of holy Joy)は、「孤独」の「聖なる喜びの魂」(the Soul of Holy Joy)に通う。彼はひたすらその場所を追い求める。ついに神の栄光のわざに満ちた書物を探して聖書が与えられるのは、「第三の百題集」27節の記述と符合する。伝記的事項として、魂の向かうべき方向に聖書を得た意義を特記したのであろう。貧困を感じ不満をおぼえて欲求することが至福の道につながる——これがこの詩の主題であり、焦がれ求める姿勢のきわ立った「不満」である。終りの方の「私は息をし、憧れ、求める」(I breathe, I long, I seek)の1行は、過去のみの姿勢でないことをひびかせる。

さてトゥラハーンは人間愛の重要性を次第に悟るようになる。「第三の百題集」22節には、新しいことに好奇心を刺激され期待を抱いた彼が、男女の人間こそ真の至福の主要素をなすこ

とに気づいた事情に言及されている。詩のテーマにも拡がりが見られる。「キリスト教国」(*Christendom*)という詩は、キリスト教国のことを聞いて賛嘆と好奇の念に動かされた若い少年が、想像上のキリスト教国を歌う詩である。名前があるべき実態を想像させるのであり、平和な神の国と幸福な人々の様子が描かれる。名前に隠されている深遠さが明らかになるまでは、少しの安らぎも得られなかったと告白する詩人は、人々が完全な喜びと幸せのうちに住むような栄光の場所を想像する。自分と人々と神の喜びが通い合うのが読みとれる。

A Town beyond the Seas,
Whose Prospect much did pleas,
And to my Soul so sweetly raise Delight
As if a long expected Joy,
Shut up in that transforming Sight,
Would into me its Self convey.

(そこは海のかなたの町／その眺めはとても楽しませてくれ／まるで長く待ち望まれた喜びが／その変形する景色に閉じこめられていたのが／私の内部に移ろうとするかのように／私の魂に心地よい喜びを呼び起こした)

心象風景の過程がうかがえておもしろい(‘beyond the Seas’は「便り」に出ていたが、‘Prospect’ ‘transforming’はトゥラハーンの詩には珍しい)。そして少年少女が自分の一番の喜びだったと言ったかと思うと、それはその人たちの喜びとも歌われる。終りの方には、「私の神の喜び(それが私に尺度を与える)」— My God’s Delight, (which givs me Measure)の1行がある。この詩は結びに至るまで人々が重要な要素を占めている。名前だけで現実ではなく想像上のキリスト教国の光景を思い、そしてそこに神の喜びが浸透しているのがいかにもトゥラハーン的である。

この作品よりも音楽的で詩として成功しているのが「クリスマスの日に」(*On Christmas-Day*)である。ここには当時のクリスマスの陽気な描写が見られる。²⁵⁾詩人はその陽気さを、教会の鐘の音がひびく中でリズムカルに表現する。鐘が鳴り天使が歌う。天使とともに人々が主の賛美の歌を歌う。怠け心から目覚めよ、と初めに自分に向かって繰り返した詩人は、生命と精気を吹きこむキリストを賛美する雰囲気包みこまれる。自分が受けるに価しないような喜びが、キリストから自分に伝わるのを感知する。謙虚な受け身の姿勢による霊的な交わりが認められよう。この詩は次のように終わる。

This City is an Engin great
That makes my Pleasure more compleat ;

The Sword, the Mace, the Magistrate,

To honor Thee attend in State;

The whole Assembly sings ;

The Minster rings.

(この町は私の喜びをより完全にする／一つの大きなエンジンである。／剣もち、
権標奉持者、行政長官が／あなたを礼拝するために盛装して参列する。／全会衆が
歌う。／大会堂が鳴りわたる)

全体が一つになってキリストを賛美しキリストに結ばれる。詩人はキリスト教信仰の美しい姿
をとらえる。個人の怠け心も価値も昇華される。韻律にも味わうべきものがあり、トゥラハー
ンの貴重な詩的成就と評してよいのではなかろうか(‘Engin’ ‘Sword’の語も珍しいが、‘Mace’
や ‘Magistrate’, ‘Assembly’や ‘Minster’はこの詩特有の語)。

「水の中の影」(*Shadows in the Water*)²⁶⁾はトゥラハーンの最も暗示に富む詩の一つで、子
供の「私」が水と映像に別の世界の存在を夢想したことが歌われる。幼児の回想に大人の認識
が加わっていく過程をたどる。経験のない幼児にはまちがいが多いと切り出すのは、幼時賛美の
詩人の言葉としては奇異に聞こえないでもないが、まちがいと言ってもかわいく意図は真実の
まちがいであり、外観と実際の混同に、むしろ常識的な経験に見られない直観の働きを買って
いる趣きがある。水ぎわで子供の想像が人々の動きまでとらえる別世界は、しかし入ることを
許されぬ逆さまの対蹠的な世界であり、トゥラハーンのイメージとしては特異なものと言える
だろう。

I call'd them oft, but call'd in vain ;

No Speeches we could entertain :

Yet did I there expect to find

Som other World, to pleas my Mind.

I plainly saw by these

A new *Antipodes*,

Whom, tho they were so plainly seen,

A Film kept off that stood between.

(私は彼らに何度も呼びかけたがむだだった。／言葉を交わすことはできなかった。
／だけど私はそこに別の世界を見出して／気を晴らすことを期待した。／私のはっ
きりと認めたのは／新しい対蹠地の人たちで／はっきりと認めはしたものの／間に
介在するうす膜のために近づけなかった)

水の映像のうす膜が両世界の出会いの場所なのに、それがまた両者を分け隔てるのである。この‘Film’の語が体の皮膚に通うことは最後に知れる。別世界の未知の人々への想像は親愛の色を深めるだけではない。

I my Companions see

In You, another Me.

They seemed Others, but are We ;

Our second Selvs those Shadows be.

(私は私の仲間を見る／あなたに、もう一人の私に。／彼らは他人に見えたが、私
たちなのだ。／第二の私たちだ、あの影たちは)

自らの投影であり、さらに注目されるのは単数の複数化であろう。単なるナルシズム的な自己愛の感情ではない。仲間としてとらえた水の中の影は、このように第二の自分たちに深化し、最後に「あのうすい表皮」(that thin Skin)が破れるとき、自分はそこに入ることが許されるだろうと結んで、時間と生の世界からの解放による彼らの圏内への仲間入りが暗示される。明らかに子供の直観に大人の認識あるいは知性が融合している。別世界へののめりこみようには、感覚と精神の両面でのトゥラハーンの神秘性がのぞいていると言えようか。

詩としては劣るが、「月を跳び越えて」(*On Leaping over the Moon*)が同じ主題を扱っていることが冒頭に触れられている。今度は弟が上空へ飛んで月を跳び越えた話で、軽い空想の戯れといった色合いが濃い。後半で詩人の想像が加わる。空自体がこの地球をとり巻いているという表現など、天国との連関を含意していて興味をそそるにしても、²⁷⁾「足下にも／頭上と同じように至福の場所がある」(under our Feet there is / As o'r our Heads, a Place of Bliss)との結論は、感覚でとらえたものが深められずに教訓化されたように思える。これはこの詩の追加の断片と考えられる2連²⁸⁾についても言えることで、「めいめいの人にこうした貯えがあるのに／分別の欠如のために私たちは貧しいのだ」(While evry single Person hath such Store, / 'Tis want of Sense that makes us poor)が、いかにもとってつけたような感じを与える。このような感覚と教訓的認識の開きは、トゥラハーンの神秘的特性のマイナスの面を表わすものか。

彼の特性が最もよく発揮されている詩に「ホサナ」(*Hosanna*)を挙げることができる。自分の領域が無際限に拡がると同時に、「中心」(Center)の自分の中にすべてのものが流入してくる。

The Deity, the Deity to me

Doth All things giv, and make me clearly see

The Moon and Stars, the Air and Sun

Into my Chamber com:

The Seas and Rivers hither flow,

Yea, here the Trees of *Eden* grow,

The Fowls and Fishes stand,

Kings and their Thrones,

As 'twere, at my Command.

(神が、神が私に／すべてのものを与え、私に明瞭に見させる／月や星、空気や太陽が／私の部屋に入ってくるのを。／海や川もこちらに流れこみ／その上、ここにエデンの木が成育し／鳥や魚が／王や王位が／言わば私の思いのままになる)

神からすべてが与えられ、その喜びの宝は永遠に輝きを失わない。天使や神と交わりながら、すべてのものを真に自分のものとして享受する。それのみでなく、「元気のよい水の流れのように／私の思いがものの上にとどまる。／それとも生氣あふれる光線のように／ものに達し、ものを照らし、ものをよみがえらせ／ものを真に有用なものにする。私はすべてに与る」(Like sprightly Streams / My Thoughts on Things remain; / Or els like vital Beams / They reach to, shine on, quicken Things, and make / Them truly Usefull; while I All partake)と歌うように、「私」が神の属性のような機能を果たすまでに至る。自己増幅はさらにつづく——「私のために世界が愛によって造られた。／私のために空や海や太陽が動く。／大地は私のために確固と安定している。／私のためにすべての肥えた土地を／私のために天使までを神が神の／そして私の至福の仲間にしたのだ」(For Me the World created was by Lov; / For Me the Skies, the Seas, the Sun, do mov; / The Earth for Me doth stable stand; / For Me each fruitful Land / For Me the very Angels God made *His* / And my Companions in Bliss)と。自己中心と愛の観念がきわ立つ。ところがこのあとつづけて、「神のおきてはすべての人に／私を愛することを命じる／もしこれを犯すならば／嚴罰に処せられる」(His Laws command all Men / That they lov Me, / Under a Penalty / Severe, in case they miss)と述べて、神のひとり子の位置におさまるのである。このような自然の被造物とキリスト教の地盤での最大限の自己拡張を、どう受けとればよいであろうか。「私」というのは人間各自におきかえて解すべきであろう。神のおきてはその人に天使と人々を愛することを命じると同時に、天使と人々にその人を愛することを命じる、こうして互いに互いの宝となるというのがトゥラハーンの説く思想である(「第一の百題集」20節参照)。「全世界の唯一のあと継ぎ」(同、29節)の認識は、神の愛と神の賛美の帰結であり、「ホサナ」という題名のもとでこそ、自分の喜びとして高唱し得たと思われる。神の賛美と自分の賛美とが、そして自分の立場と他人の立場とが相互に共通するのである。神の愛の領域で感覚も感情も生き生き

と高揚しているのがこの詩から読みとれる。個人の宗教心理に関ることと解することができよう。

最後にドウベルの稿本にあって、『至福詩集』には含まれていない詩をいくつかとり上げておこう。トゥラハーンの思想が、神から与えられたままの状態で安閑とするものでないことは、「改善」(Amendment)を読めば明らかであろう。神が造ったときより以上に万物の輝きを増すという人間の仕事のうちに、神の大いなる知恵がひそんでいるのであり、神に帰すために神から出たすべてをよりよくしようというのが彼の考えである。「おお、どんなに聖なる愛は／神の贈りものを清め高め改良することか／」(O how doth Sacred Lov / His Gifts refine, Exalt, Improve /)と歌って、神と通う人間の側の愛がその委託を果たすものと告げる。世界はそれだけでは無意味で、人間の魂の中で享受されてこそ価値を加えるとのトゥラハーン思想が(「第二の百題集」90節参照)、さらに推し広げられていると見てよいのではないか。哲学詩「予見」(The Anticipation)は次の詩行が冒頭を飾る。

My Contemplation Dazles in the End

Of all I comprehend.

And soars abov all Heights,

Diving into the Depths of all Delights.

(私の黙想は私の把握する／すべてのものの目的に目がくらむ。／そしてあらゆる高みの上に舞い上がり／あらゆる喜びの深みにもぐりこむ)

このあと神、その本質、その至福は完全、その目的と源泉は同一で、その目的と手段も完全といった思考が繰り広げられる。特に注目すべきは神の無限の欠乏に関する論議であろう。「欠乏は至福の源泉である」(Wants are the Fountains of Felicitie)とし、無限の宝の原因が欠乏にあると考える(「第一の百題集」42節と符合)。神は人間とちがって、所有で飽きることも欠乏感で損なわれることもなく、両方が常に共存し、どんな力も両者を切り離すことはできぬとの主張は、人間の学ぶべき生き方の模範を暗示するものであろう(「第一の百題集」44節参照)。次に神の行為について論じられる。「神の本質は行為そのもの」(His Essence is all Act)²⁹⁾であり、神は自らが常に行為そのものになるように行なったと述べ、神は「伝える行為」(an Act that doth Communicate)、「至福の行為」(An Act of Bliss)であると強調する。神は自他の両方の手段であるとも論じる。トゥラハーン思考は、万物がそこから出てそこへ向かう神という認識を軸に展開される。無限で絶対的で、内在的で超越的な神の存在が彼にとって常は真理なのである。

「想念Ⅱ」(Thoughts. II)は心の中で思うこと見ることの価値を扱って要を得ている。想念は神の全作品の精髓であり花であるが、繊細で感じ易いために瞬時に色あせると詩人は説く。³⁰⁾この花が神に返す捧げものであるところに神との交わりの様態がうかがえる。思うこと(Thought)

が見ること (Sight) へ移るのがトゥラハーンの目的である。人が神の作品を見て楽しむのは、神に対する愛で魂を燃え立たせる意味があると言う。

This Sight which is the Glorious End
Of all his Works, and which doth comprehend
Eternity, and Time, and Space,
Is far more dear,
And far more near
To him, then all his Glorious Dwelling Place.

(このように見ることは／神の全作品の栄光の目的であり／永遠と時間と空間を把握することになり／神にはその栄光の住所よりも／はるかに大事で／はるかに近い)

魂の中ですべての対象が価値を増すのは、霊的な世界で神により近いからだというのがトゥラハーンの主張である(「第二の百題集」90節参照)。神、世界、自己に関する彼の議論が神との親近性に要約されるのであり、この点が感覚と精神の結合とともに彼の顕著な面として指摘されてよいであろう。

「欲望」(Desire)の欲望または渴望(Thirst)も、上の「予見」における欠乏と別のものではない。表現がずっと平易になっていて、ここでは「内部の隠れた天上の愛」(An Inward Hidden Heavenly Love),つまり神との内面の交わりに力点がおかれる。欲望は欠如を意味し、神と同じく無限に欲望することが至福のためには必須であり(「第一の百題集」43節参照)、この詩では渴望のことを「至福の使節」(Ambassador of Bliss)と呼ぶ。魂に至福を与えるのはものではなくてもへの感覚であり、感覚で味わうことが真の天上の喜びである。このように愛と至福は精神の困苦を前提条件とし、真の喜びは内面の感覚ぬきにはあり得ないと考えるのである。トゥラハーンの特徴がよく出ているものの、詩として成功しているかどうかは疑問であろう。³¹⁾語の羅列や反復の冗漫さは、「愛」(Love)や「慈愛」(Goodnesse)についても否定できない。



以上のようにトゥラハーンは神と最大限に親近な心的状態を追求した。神の摂理についてわりと早い時期に疑問をもったことがあり、また時には心の揺れも確かに経験したことは無視できない点だが、こうした彼の志向は一貫して変わらなかったように思われる。感覚と霊、時間と永遠の両世界に同時に住もうとした彼は、神の賛美と愛に究極の立場を見出した。神の唯一のあと継ぎだとの意識は突飛なようでも、それは個人というものを全人類の一人と把握しての

ことであった。神との親近性をたえず探りながら、神そのものとの霊的合一を表出するには至っていないことも注目したい点だ。限界を意識していたのである。神との一体感を希求する彼の驚くべき執拗さは、個人の体験に加えるに時代の趨勢が影響したものと思われる。信仰と理性が分裂してきたあの時代に、言われるようにルネサンス以来の人間の賛美と人間の罪の思想が並存していたとするならば、トゥラハーンがその一方に異様なほど傾斜したのは、人間の神性の維持をはずれては、自己の存立も危うくなる現実だったことを暗示するかも知れない。トゥラハーンは純粋な、あまりにも純粋な霊的感覚と観念の詩人であったと言える。



本稿のために使用した作品集は次の通り。

Thoms Traherne : Centuries, Poems, and Thanksgivings, ed. H. M. Margoliouth, two volumes (Oxford at the Clarendon Press, 1965)

註

- 1) J. B. Leishman, *The Metaphysical Poets: Donne, Herbert, Vaughan, Traherne* (Oxford at the Clarendon Press, 1934)
- 2) D. Bush, *English Literature in the Earlier Seventeenth Century, 1600-1660*, 2nd edn. (Oxford at the Clarendon Press, 1962), p. 157.
- 3) *Centuries*, III, 1. 'They are unattainable by Book, and therefore I will teach them by Experience.'
- 4) J. B. Leishman (*op. cit.*, pp. 223-224) は、トゥラハーンのすぐれた詩にその詩独自の 'a gentle radiance, a candour and an innocence' を認め、彼の著書の最後のトゥラハーンの章をこの詩全部の引用で終えている。
- 5) 「世界」(*The World*) では 'When Adam first did from his Dust arise' と書いている。「創世記」2章7節—— 'And the Lord God formed man of the dust of the ground, and breathed into his nostrils the breath of life; and man became a living soul.' なお 'Dust' とともにこの詩だけに見られる 'Chaos' の語にも注意。
- 6) 彼の体験的記述は *Centuries*, III, 2. 'All appeared New, and Strange at the first, inexpressibly rare, and Delightfull, and Beautifull. I was a litte Stranger which at my Enterance into the World was Saluted and Surrounded with innumerable Joys.'
- 7) *Centuries*, III, 3. '... So that with much adoe I was corrupted; and made to learn the Dirty Devices of this World. Which now I unlearn, and becom as it were a litte Child again, that I may enter into the Kingdom of GOD.' なお「マタイ伝」の該当箇所は 'Except ye be converted, and become as little children, ye shall not enter into the kingdom of heaven.'
- 8) *Centuries*, I, 29. 'You never Enjoy the the World aright, till the Sea it self floweth in your Veins and Perceiv your self to be the Sole Heir of the whole World.'

- 9) *Centuries*, III, 2 と一致する。
- 10) 「驚異」については下記に詳論がある。
P. Grant, *The Transformation of Sin : Studies in Donne, Herbert, Vaughan, and Traherne* (McGill-Queen's University Press, 1974), pp. 172-175.
- 11) *Centuries*, II, 12. 'You are the Adam, or the Eve that Enjoy them.'
- 12) P. Grant, *op.cit.*, p. 191.
- 13) *Centuries*, II, 12. 'when you enjoy these' および前出の「挨拶」の 'if those I prize' に注意。
- 14) 下記の筆者はこの連を 'mystical fulfilment' の例に挙げている。
J. Ferguson, *An Illustrated Encyclopaedia of Mysticism and the Mystery Religions* (Thames and Hudson, 1976), p. 198.
- 15) 下記の書物はこの詩全部を句切りごとにパラフレイズしながら、禅関係の文献からの引用を並べている。
R. H. Blyth, *Zen in English Literature and Oriental Classics* (Hokuseido, 1942), pp. 144-151.
- 16) H. M. Margoliouth, *op. cit.*, vol. II, p. 349. なお下記はこの詩に覚醒した心と神との関係が最もよく描写されているとする。
H. C. White, *The Metaphysical Poets* (Collier Books, 1962), p. 320.
- 17) *Centuries*, II, 84. 'He is all Ey and all Ear.'
- 18) このあたりは下記を参照。
K. W. Salter, *Thomas Traherne : Mystic and Poet* (Arnold, 1964), p. 68.
- 19) *Ibid.*, pp. 56, 74-75.
- 20) このことは「私の精神」等の詩に言及されている。
- 21) これについて G. I. Wade はトゥラハーンの 'most magical lines' と言っている。
G. I. Wade, *Thomas Traherne* (Octagon Books, 1969), p. 178.
- 22) G. I. Wade (*Ibid.* p. 193) はこの詩を 'metrically one of Traherne's greatest achievements' と見る。
- 23) *Centuries*, III, 23. '...in a Lowering and sad Evening, being alone in the field, when all things were dead and quiet, a certain Want and Horror fell upon me, beyond imagination.'
- 24) K. W. Salter, *op. cit.*, p. 39.
- 25) G. I. Wade, *op. cit.*, p. 180.
- 26) 下記は10頁以上にわたってこの詩に解説を加えている。
S. Stewart, *The Expanded Voice, the Art of Thomas Traherne* (Huntington Library, 1970), pp. 145-155.
- 27) H. M. Margoliouth, *op. cit.* vol. II, p. 379.
- 28) J. B. Leishman (*op. cit.*, pp. 222-223) はこれを上の詩につづく形で引用している。
- 29) R. H. Blyth, *op. cit.*, p. 2.
- 30) *Ibid.*, pp. 261-262. 第一連を引用して注解を加えている。
- 31) 下記はこの詩の 3, 4 連を批判している。
M. Willy, *Four Metaphysical Poets* (in *British Writers II*, Charles Scribner's

トウラハーンの詩

Sons, 1979), p. 191.